報告３

環境問題と企業経営 ── 沖縄県を事例として ──

沖縄国際大学経済学部　村　上　了　太

沖縄国際大学の村上と申します。私の報告は、「環境問題と企業経営 ── 沖縄県を事例として ──」というタイトルです。沖縄は、またの名を「美（ちゅら）ら島」と呼ばれており、青い海と青い空を求めて、年間550万人を越える観光客を受け入れております。しかし、この地で生活を送っておりますと、様々な環境問題を目の当たりにします。そこで、本報告では、開発行為と環境意識をキーワードにして報告をさせていただきます。

用意しましたスライドは、40枚ほどあります。制限時間内に終えるためには、急いでめくっていくことになりますが、どうかお許し下さい。

さて、１枚目のこのスライドは、沖縄本島北部の「今帰仁（なきじん）」で撮影したものです。「沖縄の松島」と称される風光明媚な場所ですが、台風などの大雨のあとは、この内海、羽地内海（はねじないかい）と申しますが、ここが真っ白になってしまうのです。と申しますのは、沖縄の環境問題の一つに赤土流出というものがありまして、公共事業、農地開墾、ゴルフ場やホテルの建設によって、石灰分を含んだ土砂が流れてしまうために起こる現象です。

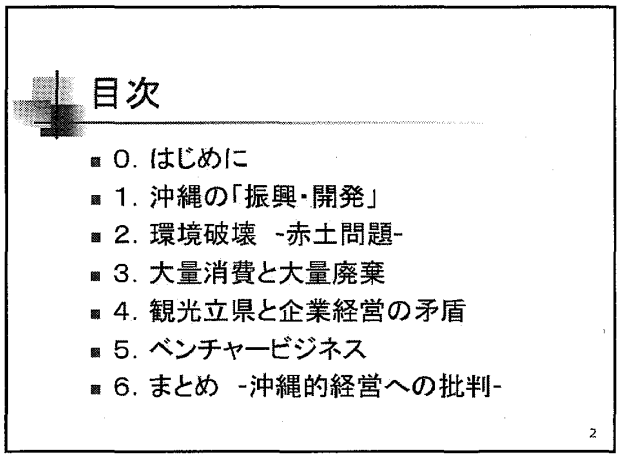
さて、２枚目に移ります。本報告では、この目次のように７つの部分に分けて報告いたします。

３枚目です。まず、「０．はじめに」ですが、沖縄の基幹産業は、３Ｋです。基地、公共事業そして観光です。これを、自立型経済構造と銘打って、健康・環境・観光の新３Ｋへと移行の兆しがあるのですが、なかなか県民レベルでの移行が見られません。

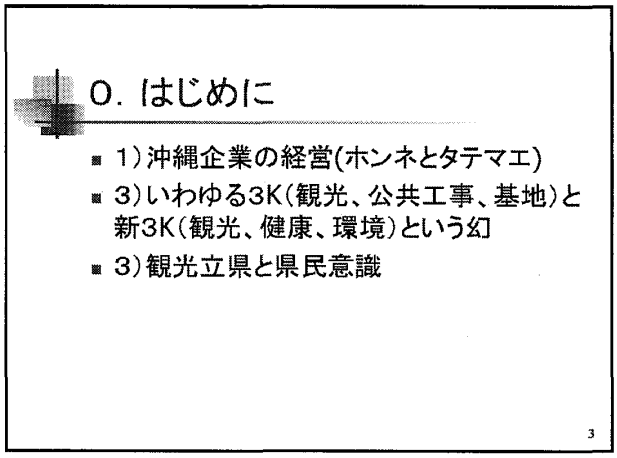
４枚目です。沖縄県の地図です。本報告で紹介いたしますのは、沖縄本島の、浦添、宜野湾、北谷、恩納そして今帰仁など、西海岸沿いで撮影してきたものがほとんどです。ほんとうは離島の現状も報告に入れようかと思ったのですが、予算の関係上出来ませんでした。

５枚目に移ります。「１．沖縄の『振興・開発』」。

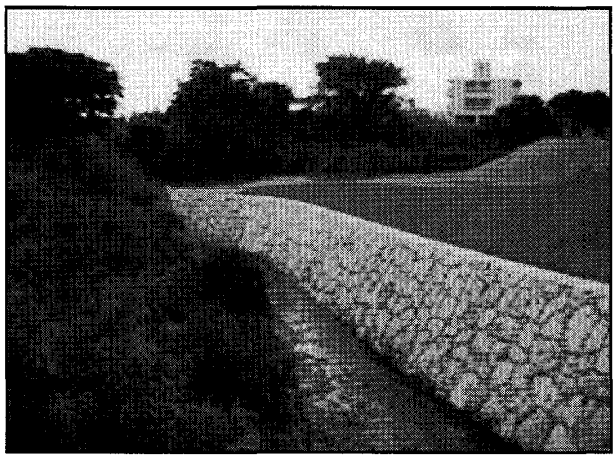
1



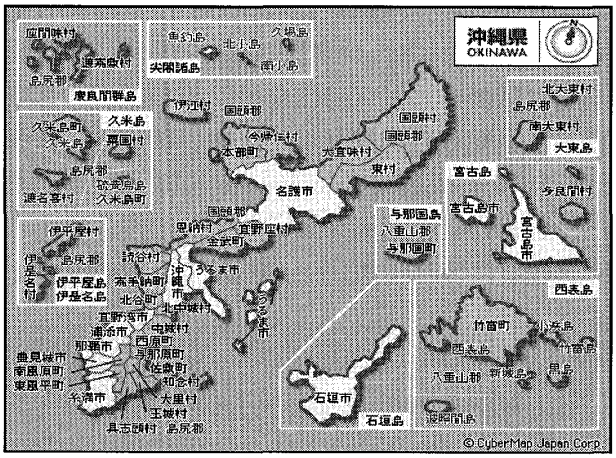
2



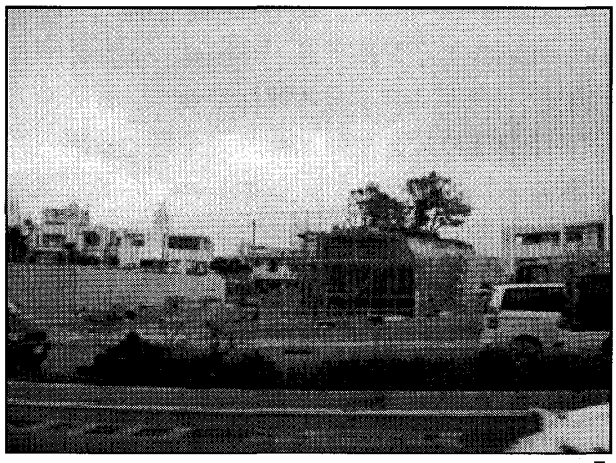
3



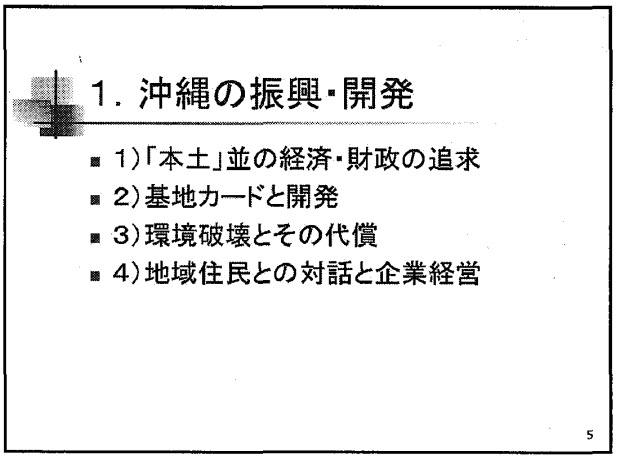
6



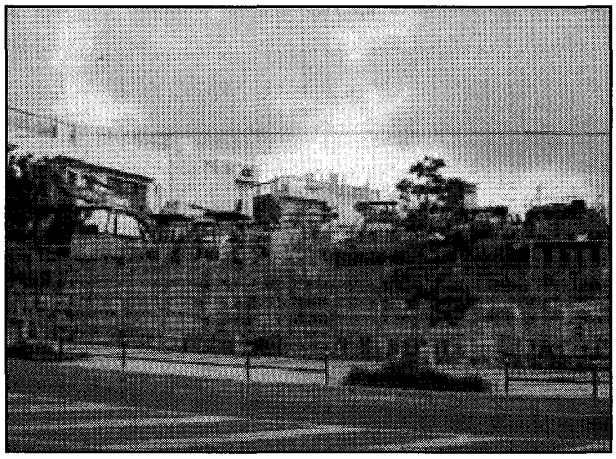
4



7



5



8

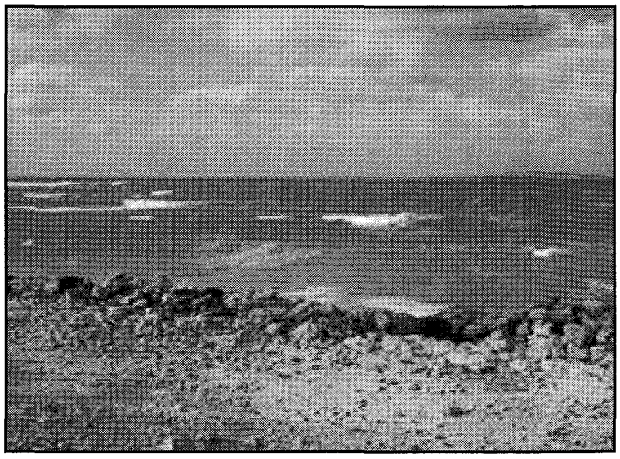
ここからが沖縄の「振興・開発」という題目で環境破壊の現状を見ていきます。

6枚目です。8月に撮影したものですが、右岸の護岸工事が行われています。左岸はありのままなのですが、沖縄の地形は脊梁部分から海へと雨水が流れて、元々洪水が受けるような地形にはなっていないのですが、やはり仕事がないのでしょうか、こういう工事が目につきます。

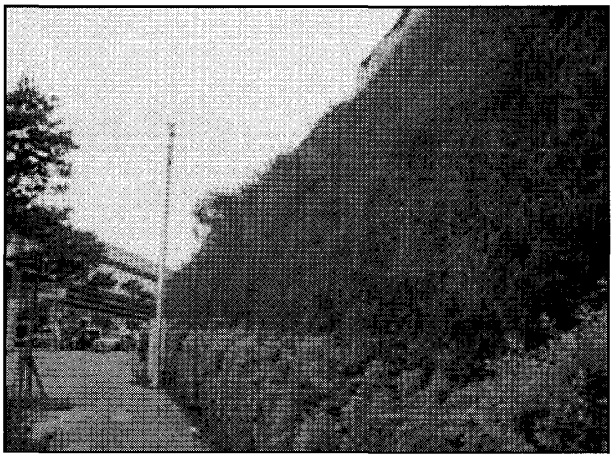
7枚目です。これは、電照菊の栽培地に突如として道路が拡幅された場所です。ほぼモヒカン刈りのような形になってしまいました。果たしてこれでいいのでしょうか。

8枚目です。沖縄の象徴といえましょうか、重機群です。公共工事への依存体質が高いため

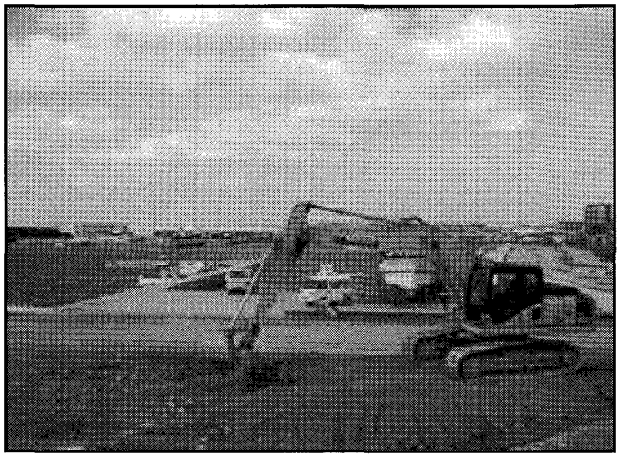
9



11



10



12

こういう企業を目にする機会が少なくないです。

9枚目です。これは急傾斜地に見られるもので、赤土流出を防ぐために設けられたネットです。山を切り開いて歩道を整備したのですが、こんなネットを張ってまで歩道を整備する必要なんかはないような気がします。

10枚目。私の自宅近くです。道路を拡幅したのはいいのですが、このように開削部分がほぼ直角に近い状態です。いつ土砂崩れを起こすかもわからないくらいの工事も行われております。

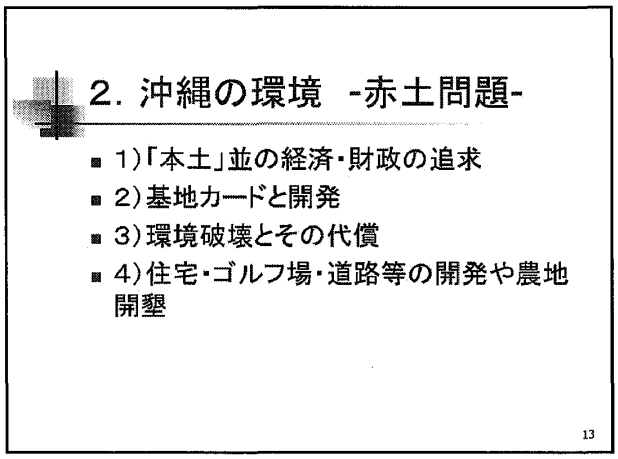
11枚目。沖縄はこのように青い海がつきものです。確かに海の色はきれいなのですが、砂浜がありません。この下の方ですけれども、実はここでも干拓工事が行われているのです。沖縄は、飛行機から景色を見るのがもっともきれいかもしれません。

12枚目。ほぼ完成しつつある港湾です。ここも元々は砂浜のある地形だったのですが、リゾートあるいは漁港の建設のために埋め立てられました。企業名は伏せておりますが、果たしてこれで観光立県といえるのでしょうか。

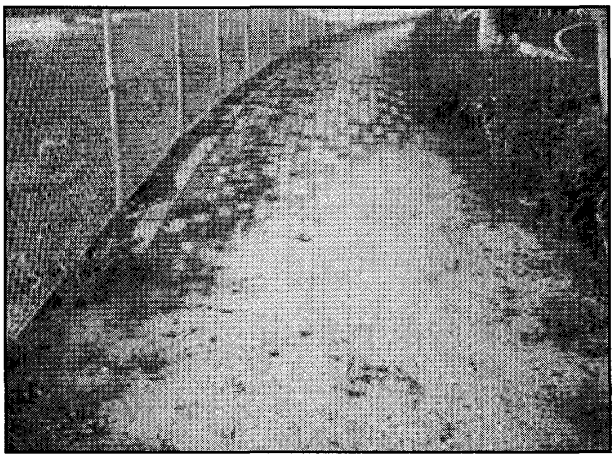
13枚目です。次の章「2．沖縄の環境――赤土問題――」に移ります。いずれにおいても「本土並み」が沖縄のキーワードです。そこまで本土並みにこだわる必要があるのか疑いたくなりますが、その一方での破壊は目を覆いたくなるものがあります。

14枚目に移ります。ここは20年ほどまえまで米軍基地でした。民間開放にともなって、現在沖縄でも最も開発が進んでいる「新都心」地区です。このように深い緑の景色もあるのですが、樹木がありません。その上側には住宅地が林立しています。

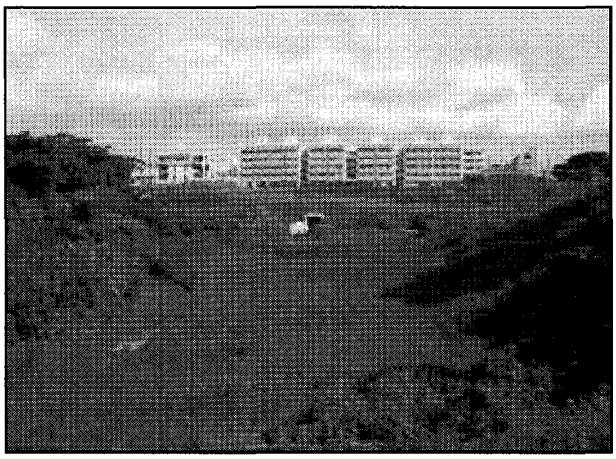
15枚目です。人はよりよい生活環境を求め



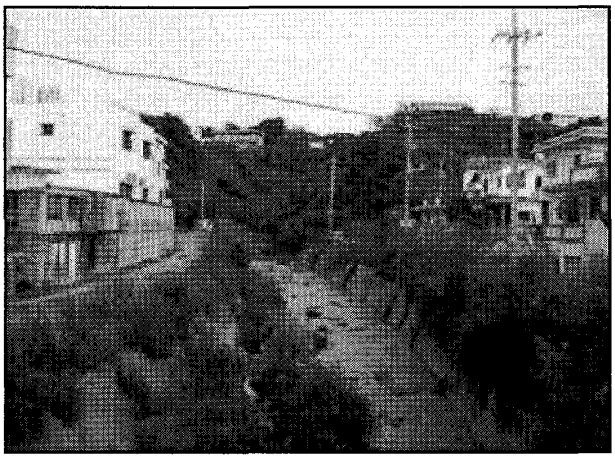
13



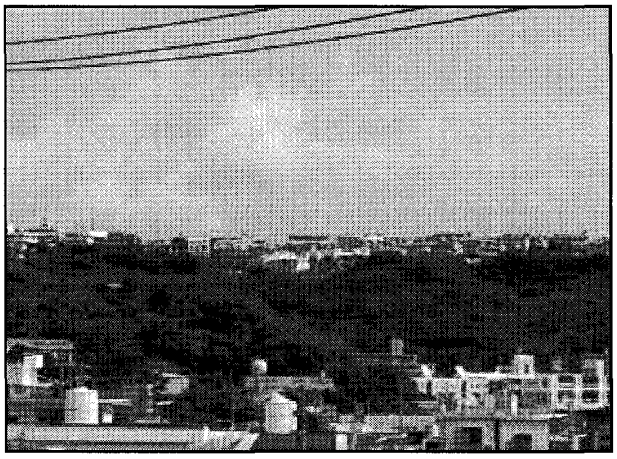
16



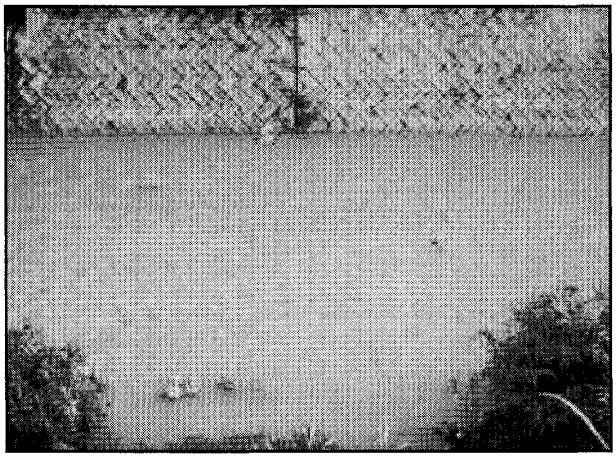
14



17



15



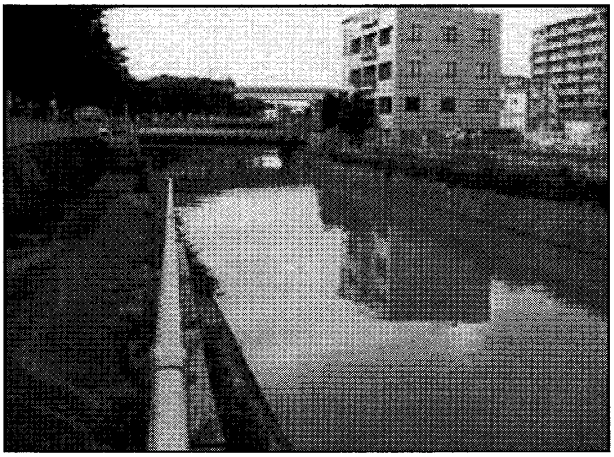
18

て、また景色の良いところを求めて住宅地を開発しました。画面中央部の樹木がある部分は、急傾斜地で住宅が建てられないところです。

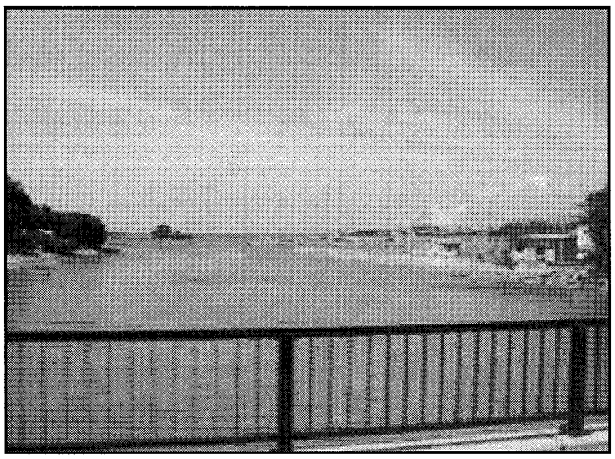
16枚目です。これが、赤土流出の始まりです。山を切り開き、住宅開発、道路工事のため歩道にも土砂が流れ出します。

17名目に移ります。この土砂が河川を辿るのですが、このように急傾斜なものですから、あっという間に海へと流れ出ます。

18枚目です。そしてこの写真です。雨が降ったあとの川は、泥色になります。ダムもそれほどないので、この色のまま珊瑚礁へと流れます。珊瑚礁が生き続けられるとは到底考えられません。



19



20

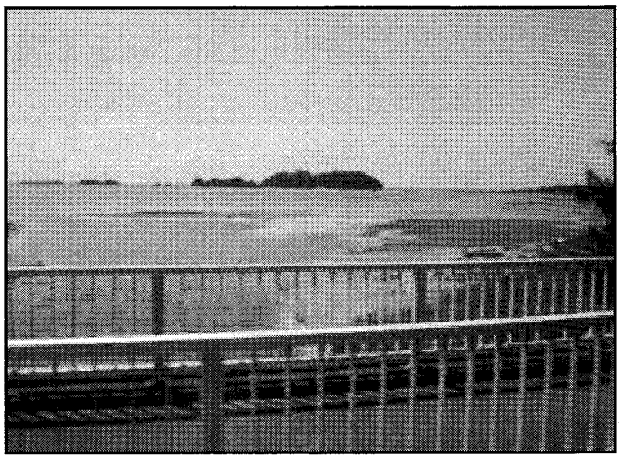
19枚目です。河口近くです。このように川も一面に泥色をしています。

20枚目です。単に泥水が海へと流れるのならともかく、他にも問題があります。このように通常の川は河口で広くなっています。沖縄はそれほど大き川がありませんので、この写真の川は大きい方です。これがどうなるかといいますと、次をご覧下さい。

21枚目です。このように、河口部分に小さな「砂州」ができます。これが大きな川なら輪中とかになります。

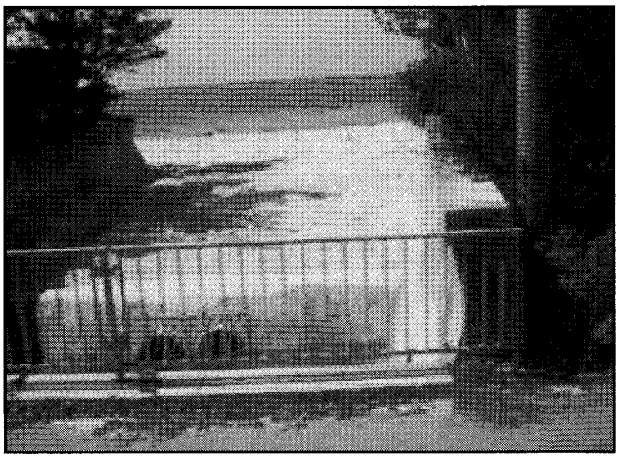
22枚目です。赤土流出がひどくなりますと、この写真のように川と海が分断されます。河口閉塞というそうです。汽水域に生息するボラなども生きられないほど、土砂が堆積されます。

23枚目です。河口閉塞が行きすぎますと、このように、そうですね20メートルはあるでしょうか。まるでダムのように土砂が堆積してしまいます。定期的に行政機関がパワーショベルなどで土砂をどけるのですが、これが沖縄の姿です。



21

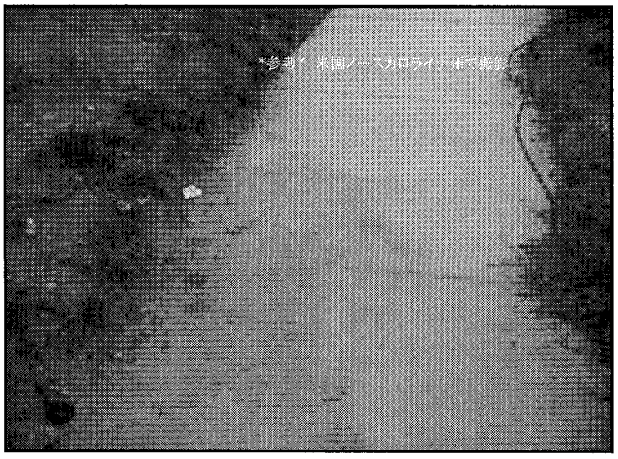
22



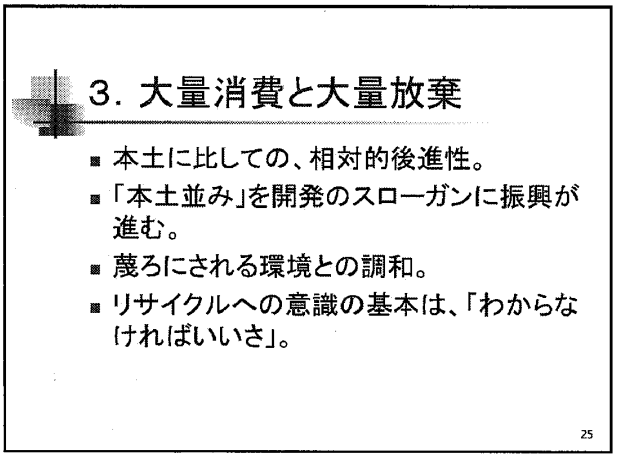
23

24枚目は、今年9月アメリカのノースカロライナで撮影したものですが、赤土で流出しているところに沖縄と共通点があるようです。

25枚目です。「3．大量消費と大量廃棄」です。



24



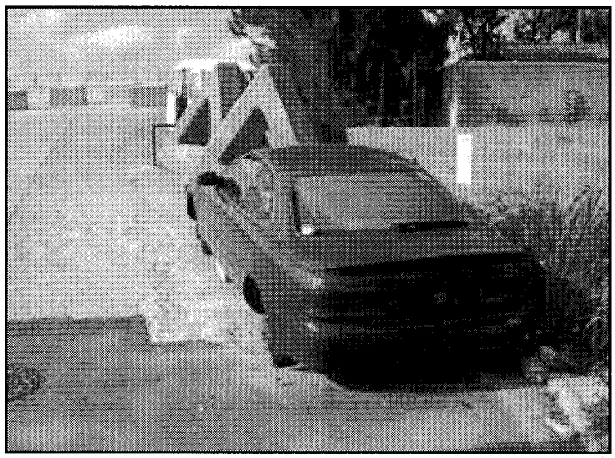
25

26

ここに書いておりますように、沖縄のものつくりは、食品とか泡盛とかごく限られた分野に過ぎません。そのため、大量生産は米国や本土に依存しています。特に大量廃棄の現状を見ていきます。

26枚目です。雑然と置かれた自動車が2台。ナンバープレートが外されております。「わからなければいいさ」という安直さの表れでしょうか。

27

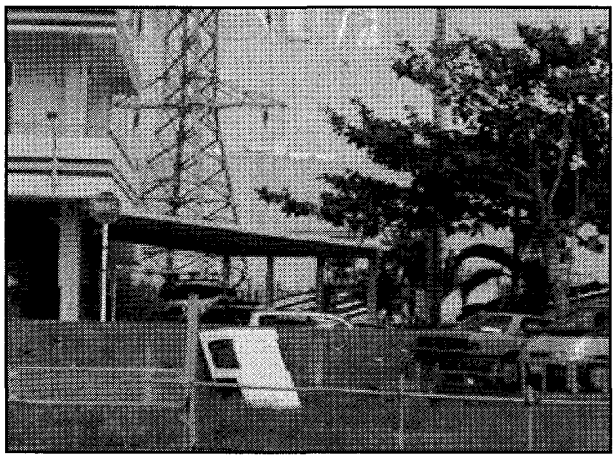


28

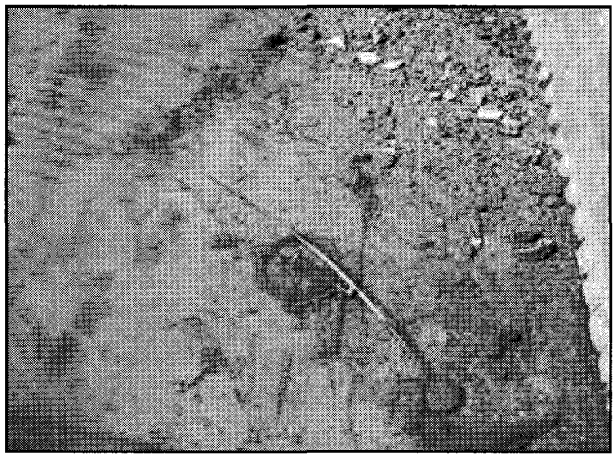
27枚目です。悪質な不法投棄です。エンジン部分がありませんし、ボンネットもはがされています。これは、エンジンに車体番号が刻印されていますので、それで調べられるのを避けるためか、こうなっています。そしてタイヤもありません。これも雑然と捨てられたものです。

28枚目です。今の写真の近くで撮影したものです。これまたタイヤがブロックに変わっていますが、こういうのが目につきます。

29枚目です。ブロックに自動車のドアが立てかけられています。左端に映っているように、ここは消防署なのです。また、青い車がありますが、これもナンバープレートが外されており、不法投棄なのかもしれません。こういう光景を見ているのですが、左端のように消防署の隣なのです。



29



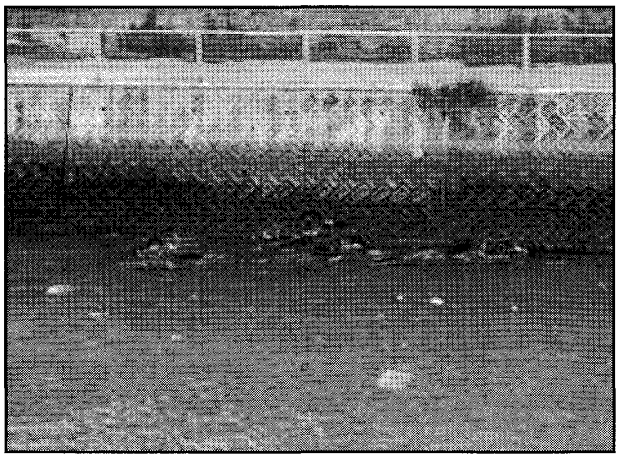
30

30枚目です。次に、川の中の不法投棄を見てみます。ヘドロの色をしているのは自転車です。誰が捨てたのかは知りません。

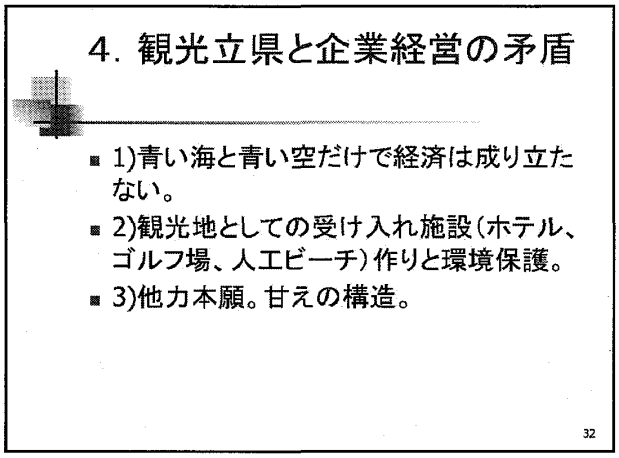
31枚目です。そうですね10台くらいはあるでしょうか。これもわからなければ川の中に投棄したのでしょう。自転車も市役所の粗大ゴミとして有料で処分してくれると思うのですが、その費用負担を逃れてこういう有様になったのだと思います。

32枚目です。次に、「4．観光立県と企業経営の矛盾」です。

33枚目です。これまで述べた、沖縄の依存体質は果たして私だけの思いかと思いましたら、この方も同じような発言をしています。嘉数学氏という清掃作業をしている方で、奇しくも私と同い年のようです。それで、早速著書の1冊を読んでみましたが、必ずしも全てに首肯できるわけではないにせよ、共感できる部分がありました。特に観光立県を県のスローガンにしている一方、ゴミの分別が出来ていないし、海岸の汚れさえ指摘しています。特に沖縄の人びとは、ビーチパーティという海岸でのバーベキューをやります。全員がそういうわけではないにせよ、バーベキューで出てきたゴミをそのままにして、また花火で遊んでもゴミを持ち帰



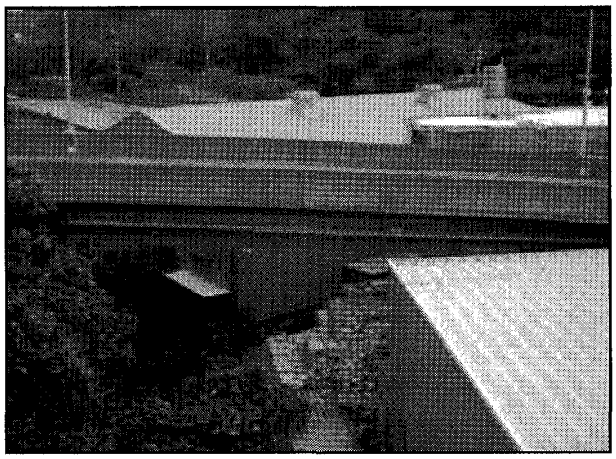
31



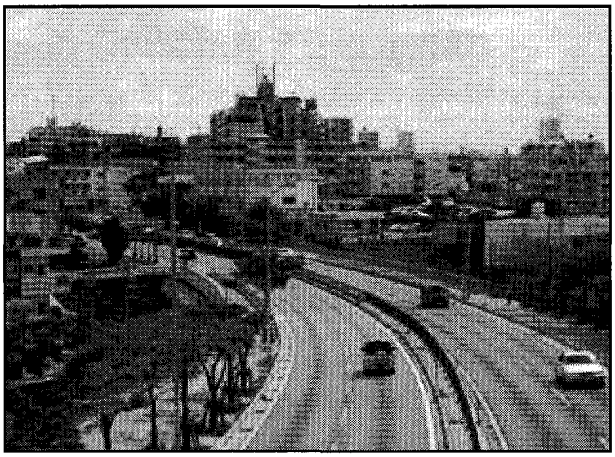
32

33

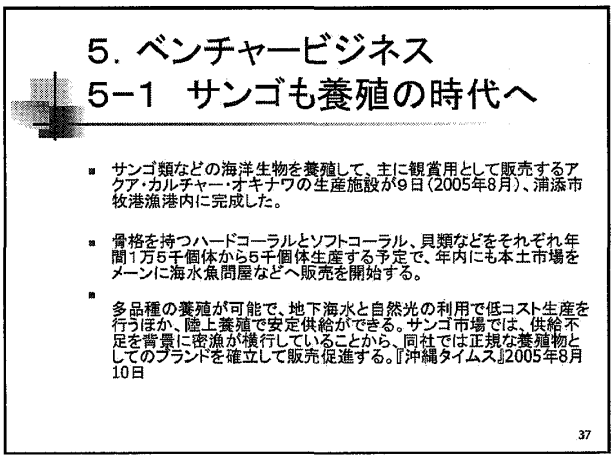
34



36



35



37

らない、こんなことが平気で繰り返されているのです。

34枚目です。海岸沿いでの撮影ですが、撮影地の宜野湾市でもゴミ袋が有料化されたのですが、このように平気で山のように捨てています。確かにゴミに名前は書いていませんので誰かはわかりませんが、環境意識の乏しさを実感します。また、他力本願といいましたが、こういう一件でも、私の授業中に問い尋ねたら、本土の責任だとか、米軍の責任だとか言い逃れをする機会があるのですが、なぜ県民の責任というか、反省がないのか不思議でなりません。

35枚目です。道路も整備されて、本土の水準並みという、確かに土木建設工事が進みまして、道路はきれいになっているのですけれども、失われるものもまだまだ大きいと。

36枚目です。これは珍しく、紙のリサイクルしている会社がこういうふうにあって、やはりリサイクルという、これからはやっぱり沖縄の一つのキーワードになるかと思います。こういった企業にぜひとも頑張ってもらいたいと。飛ばします。

最後にお伝えしたいことは、ベンチャービジネス。これはサンゴを養殖する技術が確立されまして、これは沖縄電力の子会社なんですけれども、アクアカルチャー沖縄という会社をつくりました。ハードコーラル、コーラルというのはサンゴですので、かたいやつとやわらかいやつ、1万5,000個、5,000個、販売を開始すると。養殖が可能なサンゴ、これがキーワードです。

やっぱり失業率が8％とか高くて、生きるには厳しいところがあるのですけれど、こういったベンチャーによって、また雇用が生まれたらいいなという、一つの側面があると同時に、赤土流出の抜本的な対策にはなっていないということ。

5-2養殖への懸念

- 赤土流出の抜本的な対策ではない。
- サンゴも養殖できるのなら、さらなる埋め立て(環境破壊)を助長する恐れがある。
- 建設業界への朗報になるが、「観光」への影響はいかがなものか。
- 自然の恵みのサンゴが養殖できることへの危惧。

38

38

6. まとめ
-沖縄的経営への批判-

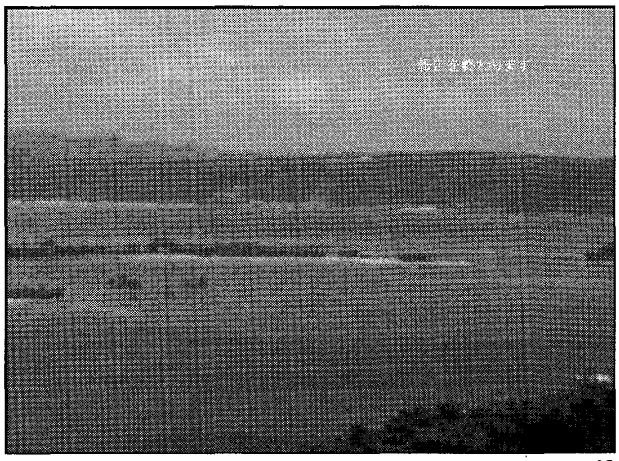
- 環境とは何か。一つには、開発との共生を前提とした環境がある。公共工事を続けるためには、環境アセスメントで「問題なし」という結論を出さねばならぬ。
- 「本土並み」の経済／財政水準を錦の御旗に、今なお開発が続く。
- 国の天然記念物のヤンバルクイナさえ、輪禍の餌食に。自動車社会と開発の申し子ではないか。
- こうした悪循環を断ち切るには、時間を要するが教育水準の向上に期待する必要がある。

39

39

さらに、サンゴも養殖できるのなら、さらなる埋め立て。2年前の統計では埋め立て面積は日本で2番目です。中部国際空港の埋め立てで愛知県が1番で、その次に埋め立て面積が広いのは沖縄です。こういった意味でも建設業者を後押しする朗報になります。ところが観光というのはどうなのか。すべてを人工、サンゴまで人工にして、果たしていいのかどうか。私は危惧しております。

環境とは何か。一つには開発との共生。ところがこの共生というのはまだまだない。この本土並みというのもやっぱりまだまだ、これが果



40

たして何をもって本土並みというのか。

このヤンバルクイナ、この山に原っぱの原と書いて山原です。クイナというのは水の鳥です。北部地方にいる国の天然記念物、これも今年に入って車に10羽ぐらいひき殺されております。果たしてこれも米軍の責任なのかということでしょうか。

でも結局、何を私、言いたいかというと、この悪循環ですね。どうしてもこういった循環を断ち切るためには、やっぱり意識を変えていかないかんと。時間を要するけれども、結局教育水準、やっぱり大学進学率がまだ低いので、やはりその教育水準を上げて、この環境問題を理解させる必要がある。ちょうど来間先生も環境学科におられますので、こういったところで環境教育というのを踏まえて、やはりこの悪循環を断ち切る努力、これは50年かかるか、100年かかるかわかりませんけれども、こういった教育への必要性を痛感いたします。

これで最後ですね。一応最後ぐらい持ち上げておかないといけないので、「ニヘイデイビル」というのは、これもありがとうございましたという、地元の言葉だそうです。